
Erasure

徳山 ノガタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E r a s u r e

【Nコード】

N 4 2 8 3 L

【作者名】

徳山 ノガタ

【あらすじ】

——男は、星を恐れていた。

大学生の川北透二は、成人式のため懐かしい故郷に帰っていた。多くの旧友たちに出会い喜びに満ちたのも束の間、ただ一人の「名前を思い出せない誰か」の存在によって奇妙な不安に襲われる。

前編・初対面との再会

綺麗な夜だった。世間を騒がす様々な喧噪から切り離された、静かな空間があたりを支配している。ときおり吹き抜ける風は心地よい温もりを運び、無音の夜でありながら冷たくはない。満天を占める星々は、これからパーティーに出かける貴婦人のドレスのように輝いている。人の手は一切必要ない。自然のものだけが思い思いに酔いしれる静寂の宴だった。

星の宴の下を、一人の男が歩いていった。男というよりはまだ青年だ。剃り損ねた口髭や不格好なスーツがそれを物語っている。都心から離れた侘しい住宅地を一人で歩いている。時折夜空を仰いでは、怯えるように目をそらして足を速める。事実、青年は星を恐れていた。遠い宇宙の彼方から届く星光が、まるで冷酷な裁判官か陪審員のように思えるのであった。元々健康的とは言い難い痩せた顔をますます暗くし、背を丸めてうつむき歩く姿は怯えているとしか形容できない。鞆は持っていないが、紙袋を提げている。この紙袋は、昼間に市の会館で受け取ったものだ。中身は極々ありきたりな「大人の心構え」を描いたパンフレットの束。

河北透二は、成人式からの遅い帰り路であった。この日の朝、スーツに袖を通した時点での透二は上機嫌であった。地元の成人式というのは概して、同窓会に似た意味合いが強い。故郷から遠い地で下宿生活をしている大学生の透二もまた、中学以降進路を別れて久しい旧友たちとの再会を待ち望んでいた。一時的に帰郷して会場の市民会館に到着し、かつて休日によく遊んだ仲間を見つけた時の喜びは格別のものではあった。同じバスケットボール部のメンバー、下らない冗談を言い合った悪友、密かに意識していた女生徒、苦手ではあったが内心良い奴だと思っていた級長。懐かしい顔ぶれは皆大

人びていたが、記憶にある面影ははつきりと残っていた。

「よお、久し振り」

スーツ姿の男が数人固まって会話しているところに、透二は声をかけて近づいた。男たちは振り向き、声の主が誰だったかを悟った途端にニヤリと笑った。

「お！　なんだ、あんまり変わってないな」

「お前は変わりすぎだよ。なんだよそのツンツンした髪は」

かつては坊主頭のバスケット部主将だった男が、陽光にキラキラ光る髪を揺らして透二の肩に手を置いた。その後に出会った昔馴染みからも、透二は概ね「あまり変わってない」という評価を受けた。それは良いことなのか悪いことなのかは微妙な評価だが、透二は深く気にせず、自分も人を捕まえては相手への率直な感想を表現した。中学時代定期テストのヤマ当てが得意だったおかげで、友人の数は多い。少し首を回せばすぐに知り合いが見つかる。市民会館の前庭には、今年度成人した、あるいはこれから成人する若者たちであふれていた。大学進学や就職で県外へ出ていた若者たちが集まり、思いう話に花を咲かせている。市には二つの中学校があり、その場には両校の卒業生が集合していた。当然知らない顔もたくさんいる。透二はまだ他に見知った顔はいないかと周囲に視線をやっていたが、ふいにその動きを止めた。

一人の男が、周囲の者と同様にスーツ姿で立っている。その顔には見覚えがあった。だが、誰であったかわからない。名前も思い出せない。やや面長だが幼さの残る顔つき、黒い髪も少年のように短く無造作だ。おそらく「あまり変わってない」部類だろう。そこま

では透二もすぐに思いついたが、肝心の記憶の中にこの男の顔を見つけれない。男は誰とも会話せず、庭の隅に植えられている木の陰にたたずんでいる。首を回して視線をあちこちに飛ばしているところを見ると、誰かを探しているようだ。待ち合わせの約束でもあるのか、それとも数秒前の自分と同じく、ただ話しかける相手を求めているだけなのか。

「あつ」

と、男が言ったような気がした。距離がある上に多くの雑声が飛び交っているのだから声は聞こえないが、表情の変化でそう感じた。少年のような男は、透二の顔を見つけて声をあげたのだ。その瞬間、確かに知っている人物だとわかった。しかし記憶の中に現れない。卒業アルバムの写真を思い返してみても、その男の顔はなかったはずだ。声をかければわかるかもしれない、と思いついた矢先、会館の玄関から年老いた声が響いた。

「もうすぐ成人式を始めます。受付を済ませていない方は早めに……」

透二が案内に反応して視線を反らした隙に、男はどこかへ消えていた。そろそろと玄関へ向かう人波の中に目を凝らすも、謎の男は見つからなかった。そのうち透二も友人に呼ばれ、玄関ホールの受付へと向かって行った。

成人の儀式そのものは実に退屈なものだ。権威ある者のありがたい演説、子どもに道徳を説くかのような大人の心構えの講義、誰も歌詞を覚えてなんかいない町歌斉唱。そして出身校ごとに別れての記念撮影。檀上に上がりつつ、透二は記憶を探り続けていた。先ほどの男には確かに見覚えがある。最近のことではない。間違いなく

中学校時代の知り合いだ。しかし、同じ檀上に立っている仲間の中にはその姿がない。席に待機しているもう一つの学校の卒業生の中にも見当たらない。今どこにいるのか。あいつとはどこで知り合ったのか。

答えを見つけられないまま式は終わり、透二は再び前庭へ出た。改めて男を探そうかと考えていると、ツンツン頭の旧友が近寄ってきて「みんなでメシでも食いに行かないか。色々話したいこともあるだろ」と誘ってきた。空腹は感じていなかったが、昔話をするのは好きだ。透二は考えることをやめ、友人の後について歩き出した。その時、再びあの男を見つけた。やはり誰とも話さず、ひっそりと木陰に佇んでいる。そして男は、今度は真っ直ぐに透二の方を見ていた。目が合った瞬間に視線をそらしたが、間違いなく男は透二の方を見ていた。割って入った人波に視界を遮られた間に、男はまたしても消えていた。

中学を出ると同時に地元を離れた透二は、近年急激に成長した繁華街に詳しくない。友人たちに誘われるままに歩き、時折冗談を飛ばす。その間出来るだけ笑顔は絶やさなかったが、心の中はざわついていて。ただ一人の人間の名前を思いだせない、というだけならばすぐに気を紛らわせることもできるが、その相手は自分を知っていて、しかも二度も目が合ったのに声をかけてこない。こちらが少し目を離れた間にどこかへ去ってしまっているのだ。それになぜ自分は相手のことを思い出せないのか。透二は比較的社交的なタイプで人付き合いも多く、それだけに人の顔や名前を覚えることは得意である。それにも関わらず、記憶の網は空振るばかり。

不穏な思いを抱いたまま、透二は懐かしくも見慣れぬ街を歩いた。

思い出探し

誰かに聞けば答えが見つかるかもしれない。昼の街を歩く最中、透二は幾度もその考えを浮かべ、その度に否定し続けていた。いったいどう尋ねれば良いのだろうか。問題の相手を指さして「アイツ誰だったのかな？」と聞くことが出来れば簡単だ。しかし透二がその男を見かけたのはほんの一瞬のことで、周囲の仲間の注意を引く余裕もなかった。わずかに観察した限りでは男の容姿に大した特徴も見つけられず、「どんな奴だった？」と聞き返されては説明のしようがない。精々、少し幼い顔つきだった、という程度だ。

「隆次と奥村が付き合ってるって知ってたか？」

大柄な男がメニュー片手に言えば、ツンツン頭が答える。

「奥村って、二組のスゲー可愛かった奴？ 初めて知ったぞ、おい。いつからだよ」

「あの二人、同じ高校行つて、大学も一緒なんだよ。それで付き合い初めて、何でも今年中には結婚するとか」

「マジかよ……。何で隆次があんな子をゲットできるんだよ。ってかアイツ、中学ン時は山中と付き合ってたじゃん」

「ああ、そっぴや前山中のこと狙ってたよな」

「おい透二！ 余計なこと言うな！」

「いやもつと聞かせる。オレは初耳だ。どんどん聞かせる。その話

詳しいことまで全部聞かせろ」

「話したらここのお代払ってくれるか？」

部活帰りによく寄っていた食堂で、大人になった五人の男たちが談笑する。透二もその一人として思い出話に花を咲かせ、冗談を飛ばして笑っていた。表向きは明るく振る舞っていたが、胸の内の不安は少しも拭えていない。会話の中で自然に答えが見つかるかもしれない、とかすかな期待を抱きもしたが、話の中で蘇る記憶のどの場面にも、男の顔は存在しなかった。それを除けば、中学時代の記憶は仲間の誰よりも鮮明だった。少し意識を集中すれば、日常の些事や会話の内容を脳裏に再現できた。五年も前のことだが、高校時代の記憶よりも中学時代の記憶の方が強く残っていた。

「あれ？ そういや透二さ。お前こそ崎本と仲良かったじゃん。あれ結局どこまで行ったんだよ」

逆転の隙有り、とばかりにツンツン頭が透二に箸を向ける。途端に中身の変わっていない大人たちは関心の矛先を変えた。

「おお、そうだった。崎本……優子だったっけ？」

「そうだそうだ。肌が白くて、何か明らかにオレらとは生まれが違うって感じのお嬢様」

ニヤニヤした視線を一身に受け、透二は眉をひそめて言い放った。

「……別に、付き合っていないよ。他に好きな人がいるらしいから」

「らしい、ってなんだよそれ」

詳細な説明を求める声があがる。しかし、この話はやめてくれ、という態度が伝わったのか、話題はまた別の方へと流れて行った。恋い焦がれた女性の記憶がよみがえり、思考は一時的に謎の男から離れた。学年で一、二を争う美女の心を得られなかったことは、今でも心残りだ。彼女を狙う男子は多かったが、その中で最も可能性が高いと目されていたのが透二だった。

思えば、中学時代は透二にとっての最盛期だったかもしれない。学習能力も体格も人並みだったが、テストの成績では常に上位に食い込み、体育の競技でも悪い評価を得たことはない。人付き合いでもほとんど失敗がなく、友好関係は実に広い。二十歳という年齢では己の全ては見えないが、中学の制服に袖を通していた三年間は、まさに人生において最高の、そして無敵の日々であったように思える。記憶が鮮明なのはそのためだろう。輝かしい時代に比べれば、現在の透二は実に平凡なものになっていた。高校も大学もランクは二流、単位を落とすことは少ないもののかつての勘の冴えはなくなり、必死に勉強を重ねることによってやく追いついているのが現状だった。

「お前さ、大学出たらどーすんの？」

「そりゃ就職だろ。院まで行く余裕はねえよ」

「となると、やっぱり早めに動かなきゃダメかなー……。まだまだ就職も大変だしな。キツイキツイとはわかってても、昔なら結局どうにかなるもんだと思ってたけどな。いざ問題を目の前にしてみる」と冗談抜きに地獄だわ」

友の切実な声が耳に痛い。誰もが同じことを痛感しているのだが、

透二にとっては特に強烈な意見だった。何事も上等に仕上げて来られたのに、今は平均を追いかけるだけで手一杯だ。幸いこの話題もすぐに変更された。

食事が済んでも話の種は尽きず、談笑は長々と続いた。店の大将とは顔なじみで他の客も少ないため、男たちは存分に思い出を語り合った。透二はそれが嬉しかった。いくらか嫌なことも思い出されてしまうが、そうすることで別なことを忘れることが出来た。答えの出ない謎をいつまでも探っているよりはずっと幸福でいられた。しかし、それも長くは続かなかった。思い出の話題が二転三転し、文化祭の話に行きついてしまったためだ。

「オレらが三年の時の文化祭、覚えてるか？ 委員長が合唱の練習をムチャクチャ張り切っててよ、毎日遅くまで残らされて大変だったよな」

「そうそう。あーゆー妙に熱くてマジメな奴がいるとダルいんだよな。情熱持つのは結構だけど、周りに迷惑かけない程度にしてくれてんだ。健全な努力は免罪符じゃねえっての」

「やる気を出さないオレらの方が罪人なんだろ。学校側にとっちゃ。その罪に対する罰が毎日の居残り特訓ってわけだ。部活の特訓で遅くなるのは平気なのに、歌の練習で残らされるとキツイのは何でだ？」

やる気のない側だった透二が疑問を投げかけると、ツンツン頭が答えた。

「部活は自分で好きなの選んで入ったけど、練習はクラス全員強制参加だからだろ。窓の外に星空が見え始めた時はほんとゲッソリし

たな。秋だから日が落ちるのが早くて」

「星空……」

「部活帰りなら適度に体温も上がってて気持ちいいぐらいなのに、面倒臭い合唱の後だとただ寒くて暗くて嫌なだけだったな」

「よく言うよ。女子をエスコートしてやるチャンスじゃん、って息巻いてたのは誰だ」

「うるせえ！」

高い笑い声があがったが、透二だけは星空という単語に意識が向いていた。星。教室の窓から見える星空はハッキリと記憶に残っている。夜の闇に包まれゆく中で蛍光灯に照らされた教室は、普段と違う秘密めいた雰囲気があった。一刻も早く練習が終わらないかと心待ちにする者と、歌のためではなくやる気ない生徒を叱るために声を枯らす者との温度差が居心地の悪い空気を生み出し、そこにいる全員の体力を消耗させていく。適度に歌うふりをする者もいれば、完全に余所を向いている者もいた。時間が経過して委員長の気力体力が萎えてくるほど、生徒たちは自由に振る舞う。

突如、脳に電流が走った。鋭い痛みにも似た痺れを感じた。もしかしたら小さな悲鳴をあげたかもしれないが、四人の仲間は気付いていない。記憶の中の景色。指揮者の手を見ようとせず、窓に顔を向けて星空を眺めてばかりいる生徒がいた。影が薄く、誰にも気にかけてもらえないような男子生徒。その顔は、成人式で見かけた謎の男に瓜二つであった。

黄金時代

クラスに一人か二人はいる、影の薄い男。人付き合いがよく、常に騒ぎの中心近くにいる透二とは対照的な存在。喧噪からは可能な限り距離を置き、誰かに求められない限りは口を開かない。そんな輩に好んで声をかける者も少なく、自然に言葉を発する機会は失われていく。透二が記憶の中で見つけ出したのは、そんな男だった。

覚えていないのも、すぐに思い出せないのも、無理はない。その男との接点はほとんどなかったはずだ。そいつが誰かと会話をしている情景さえほとんど思い出せない。クラスメイトでありながら限りなく「他人」に近い存在。

だが、それだけの事だけで問題は解決してくれない。確かにその男は中学三年時のクラスメイトだった。そのことを念頭に置きながら改めて卒業アルバムの写真を思い返すが、その中には依然として男の姿がない。集合写真の中にも、各行事の写真の中にも存在しない。それどころか、肝心の名前が未だに思い出せないのだ。

「……なあ、オレらのクラスで、転校した奴っていなかった？ 三年の時のクラスで」

突然の質問に、ツンツン頭が目丸める。この時の話題はすでに二年生時の修学旅行が中心になっており、透二の出し抜けの質問はあまりに不適當であった。

「転校生？ 確か……オレらのクラスにはいなかったぞ。四組の大石ってヤツなら転校したらしいけど」

「そうか……そうだよな。オレらのクラスから途中でいなくなった奴なんて……」

「おい透二どうしたよ？　なんかさっきから元気ねえぞ」

さすがに友人たちも透二の異変に気づいたのか、怪訝な顔で尋ねてくる。しかし透二はそれに答えない。先程まで出せなかった質問を今度は出せるからだ。

「なあ、アイツ覚えてるか？　オレらのクラスで、影が薄くて……ええと、その、目立たない奴」

その男が同じクラスにいたことは確かだ。決して記憶違いではない。単なる空想・幻想にしては記憶の映像が鮮明過ぎる。あれは間違いなく現実の景色だと確信していた。

「影が薄くて目立つ奴ってのは聞いたことないな」

「揚げ足取るな。他に特徴は……そうだ、星を見るのが好きだった。文化祭の練習で夜まで残ってた時、ずっと夜空ばかり見てた奴だよ。いただろう？　名前わからねえかな」

「星空が好きい？　そんなロマンティックな奴がウチのクラスにいたかよ。オレは練習の時ヒマでヒマで仕方なかったから教室のあちこち見てたけどよ、わざわざ窓の外を見つめるなんて誰もやってなかったぞ。段々空が暗くなっていくのにみんなうんざりしてたんだから。チラッと目をやってため息つきながら目を逸らすのなら一杯いたけど」

他の仲間からも、似たような答えしか返ってこなかった。そんな

はずはない、となおも透二は食いつこうとするが、「気のせいだろ」という一言に押し黙ってしまった。気のせい、で話を済ませたいのは誰よりも透二自身だ。しかし、ますます男の謎を追求せずにはいられなくなった。

自分以外は誰もあの男を知らない。覚えていないのではなく、知らないのでは……？ そんな疑惑が新たに生まれ出ていた。本当にあの男は実在したのか。きつと実在する。今日出会った男は確かに自分の方を見ていた。相手は自分のことを知っている。本当に中学時代に会ったことのある人間なのか。今の記憶に間違いはないのか。それならば何故誰も覚えていない、あるいは知らないのだ。記憶と事実の辻褄が合わないのならば、記憶の方が間違っているに決まっているだろう。論理的に考えればそれが正しい。それなのにどうしても「気のせい」で済ませられないのか。いったいあの男の何が透二の心をかき乱しているのか。悪夢の中で、遠ざかる出口を追いかけているかのようだ。

「おいおいマジで大丈夫か？ 顔色悪いぞ」

「ん、いや平気。……昨日徹夜でレポートやってたから疲れたんだよ、たぶん」

咄嗟の嘘だったが、大学生にとっては十分すぎる理由だった。話題の矛先は逸れ、透二は注目から解放された。これ以上何かを質問しても謎が深まるだけだとわかった以上、その方が嬉しかった。

どうして、自分はいつまでもあの男のことを気にかけているのだろう。何故こんなにも不吉な胸騒ぎがするのだろう。星空を見つめる男（中学生なので男というよりは少年だが）と自分の関係とはいったい……。確かめる手段を一つだけ思い出した。実家に帰り、当

時の日記やアルバムをひっくり返すことだ。かつての透二には日記を書く習慣があったため、それを読み返せばより鮮明な記憶を取り戻すことが出来る。本当に男が実在したのかもアルバムを見れば答えが出るはずだ。しかし、透二はまだ家に帰りたくなかった。答えを導く参考にはならずとも、久しく再会した友と別れるのは名残惜しかった。しかしそれ以上に、真実を知ることが恐ろしかった。可能な限りその時を先延ばしにしたかったのだ。

長居した食堂を離れ、一行は再び町に出る。次の目的地は特に決めなかったが、歩きだせば自然と行くあてが浮かんでくる。かつてたむろした公園。神社の境内。母校のグラウンドを遠巻きに眺めたりもした。

誰もが思い出を求めている。透二ほどでないにしても、この時のメンバーはみな、中学時代に輝き、今はその光を失いつつある者であった。それは多くの人間にも当てはまることかもしれない。自由と束縛が混じり合い、子どもから大人へ羽化するためのサナギの期間。最も多くの夢を見ていられ、重苦しい現実への旅立ちに身を引き締める日々。大人ぶっていながらもまだ無邪気に笑っていた。「子ども」でいられた最後の時間。あの時から上手に大人になれた者もいるだろう。だが、混沌深い社会の空を自由に飛べず、あがき苦しむ者の数は遥かにそれを上回る。そして「あの頃はよかった」と思うのだ。思い出だけは、裏切らない。

郷愁に浸るうちに時は流れ、町は夕刻の色に染まり出した。酒でも飲もうか、という意見が出たが、透二はそれを断った。自分は酒の苦手な人間だとよく自覚していたからだ。そして、このツンツン頭の友人はどちらかと言えば飲酒を強要したがるタイプの人間であるとわかっている。なにしろ中学の時分からそれをやっていた奴なのだ。久方ぶりの帰郷なのだから数日はここに留まる予定だ。また

明日も会うことを約束し、透二は仲間たちに別れを告げた。

夜空に最初の星が光るのを見た瞬間、確信した。——とうとう真実と向き合う時が来た、と。

星夜に紡ぐヒストリー

真実に向き合うという決意を固めはしたものの、一番星が上がった途端にそれは萎んだ。何の変哲もない星が、心に強い呪縛を投げかけてくる。足取りが重い。己の行く先に大きな闇が待ち受けているのだと思い知らされる。

綺麗な夜だった。世間を騒がす様々な喧噪から切り離された、静かな空間があたりを支配している。ときおり吹き抜ける風は心地よい温もりを運び、無音の夜でありながら冷たくはない。満天を占める星々は、これからパーティーに出かける貴婦人のドレスのように輝いている。人の手は一切必要ない。自然のものだけが思い思いに酔いしれる静寂の宴だった。

そのどれも、透二の心を癒してはくれなかった。住宅地に行く足の動きは鈍り、顔を上げることすら億劫になってきた。心の中の何かが語りかけてくる。「今ならまだ逃げられる」と。何から逃げるというのか。自分がやっている、やろうとしていることはそんなに大それたことではない。名前を思い出せない知り合いの正体を探ることはそんなに大事なのだろうか。何をためらう必要がある。何から逃げろというのだ。

日暮れからさほど時が経っていないというのに、住宅地は恐ろしく静かだ。一つ一つの家々では夕食や団らんの声音が響いているのだろうが、星空に包まれた道路にはほとんど届いてこない。

（僕は何をそんなに怯えているんだ。悪いことなんて一つもしていない。……堂々と歩いて真実を確かめればいいだけのことだろう？）

自問する声だけが胸中に響く。その声が静寂の中であまりに大きすぎたため、透二は目の前に人が立つことにすら気がつかなかった。

「やっと、一人になってくれたな」

至近距離でつぶやかれた低い声が轟音のように鼓膜を刺激し、透二の頭は意思を待たずに跳ね上がった。幽鬼のごとく現れた影は、まさに透二が探し求めていた人物そのものであった。ぎこちなくスーツを着こなした細身の男。改めて見つめてみると、やはり存在感の薄い男だ。視覚的にわかりやすい特徴もなければ、自然に人を惹きつけるような気力、雰囲気の欠片というものが全く感じられない。声にも、臭いにも、個性というものがない。

この男に出会って真つ先に透二が考えたことは、果たして目の前の男が本当に実在しているのかというものだった。握手の出来る距離にいながらその存在を疑わねばならないほど、覇気のない男なのだ。その考えを見抜いたかのように、男が口を開く。

「オレの名前は冬木。冬木修平。お前はオレを覚えていないだろうけど、オレはお前を覚えているぞ、川北透二。……でも、それを思い出したのもつい最近だ」

人形のように無機質な瞳がまっすぐに透二を射抜いており、その奥に輝く情念の光だけが、唯一の存在証明であった。死仮面のような表情の裏に逆巻く炎を見出した時、ようやく透二は冬木と名乗る男の存在を確信した。そして呼吸を整え、極めて平坦な声を絞り出した。

「冬木……。すまない、どうしても思い出せないんだ。前に会ったことはあるよな？ ええと、どこで会ったんだっただかな……」

精一杯友好的な声色をつくったつもりだ。いざ相手を目の前にしてしまえば、それが妙に影の薄い男とはいえ同じ一人の人間ならば、無闇に恐れを抱く必要はない。少なくとも幽霊や空想の類ではないとわかっただけでも心に余裕があった。

「そうだ、中学三年の……確か、なあ」

慣れない相手とのコミュニケーションの基本だ。自分の知っていることをあえて半分だけしか知らないように振る舞い、言葉の続きを相手に繋げさせる。相手を会話に引き込むごく一般的な手法。かつての栄光を失いつつある透二が今なお抱きしめている、友好関係の礎だ。しかし、冬木の言葉はそれを打ち砕いた。

「お前が一人になってくれるのをずっと待っていた。昼間に初めて見かけたときから、ずっとお前を見張っていた。二人だけで話をするためだ」

驚きのあまり透二の口が固まった。今この場所で再会したのは偶然ではないというのだ。冬木の正体は依然としてつかめない。実物に出会ってもなお、記憶の映像は新たな情報を与えてくれない。そんな状況の中で混乱する透二へ、冬木は容赦なく言葉を浴びせる。

「誰にも邪魔をされたくない。オレについて来い。あそこの角にある公園なら夜中は誰も来ない」

そう言うなり、冬木はさっさと背を向けて歩きだした。言葉での命令はしたが、手を取って強引に引き連れるようなことはしない。ただ歩いていくだけだ。

逃げるなら、今が最後のチャンスだ。運動能力はなまってるが、それでも冬木よりは自分の方が脚力に優れているように思える。反対方向へ急いで駆けだせば繁華街の雑踏の中まで逃げきれ。右側の脳がそう叫べば、左側の脳がその主張を却下する。逃げる必要などないじゃないか。あの男が自分に何の用があるのか知らないが、まさかいきなり拳銃を突き出して撃つようなことはあり得ないだろう。常識で考えれば当然だ。そもそも、危害を加えられるような覚えは全くない。そう、ここが最も肝心だ。透二には覚えがない。

だから、確かめねば気が済まない。透二は、冬木の細い影に続いて歩み出した。

住宅地の中に小さな公園。入口のすぐ脇にあるベンチに冬木が腰掛ける。その隣にはもう一人分の座れるスペースが空けられていたが、透二はそこに座らず、向かいの花壇の縁に腰掛けた。冬木も隣に座るような要求は出さなかった。

「川北透二。お前はオレを覚えていない」

念を押すように、冬木が同じ言葉を繰り返す。

「覚えていないのも当然だ。お前がそういう風に仕組んだのだから。お前は、お前自身を含む誰の記憶からも、オレの存在を消してしまっただ。……そのせいでオレは全てを失った」

透二は何も言わない。何かを言っても無駄だとわかったからだ。どんなに突拍子のない、非現実的な話であろうと、まずは相手の言いたいことを全てしゃべらせてやることにした。相手が狂人ならば、それを確信した瞬間に逃げ出す覚悟も決めた。幸い、冬木はこちらの反応を確かめようとせず、舐めるように地面を見つめながらブ

ツブツと語り続けた。知りたがる透二に対し、冬木は真実を教えたがっていた。

「お前がオレを消したんだ。一方的に、理不尽に……。お前の持つあの力で。お前はあれだけの力を持っていたのに、それに飽き足らず、何も持たないオレに容赦なく牙を剥いた」

後編・D i a r y

透二は実に辛抱強く冬木の話聞いていた。その過程で、何度「そんな馬鹿な」という言葉を口に出しかけただろうか。相手はまともな人間ではない、とあらかじめ覚悟していなければ、容赦なくその言葉を叩きつけたことだろう。知っているあらゆる言葉で罵倒しても腹の虫が治まらない。なぜなら冬木の語った真実の第一声が「お前は超能力者だった」という内容であったのだから。

「お前には不思議な力があつた。どうしてお前に……お前なんかになんかそんな力が宿っていたのかはわからない。だがお前はその力を存分に堪能していた。全てにおいて、人より先に答えを得ながら生きていた。……その顔は信じていないな。オレが狂っているとも思っているのだろう。それはお前に記憶がないからだ。狂っていたのはどちらか、どうせすぐに思い出すことができる」

透二は信じていない。無論信じるつもりもない。

「お前は、いつでもクラスの中心にいた。明るくて、人付き合いが良くて、テストの成績も悪くない。容姿こそ平凡だが……」

好き勝手な言い分にますます腹が立つ。なまじ心当たりがあるだけに耳が痛い。

「オレは、そんなお前が羨ましかったのかもしれない。真実を知った今となつてはその逆の感情しか抱けないが、あの時のオレは少なからずお前のことを尊敬していた。お前の周りではみんなが笑っていたんだ。全てが上手く、出来すぎなぐらいに上手く物事が動いていた。それにひかえオレは、そんな流れにも乗れず、いつも一人で

いた」

自虐的な笑みに浮かぶ唇が、休むことなく言葉を吐き続ける。屈辱。告白。愚痴。嫉妬。溢れる感情を言葉に変換するのに手間取っているのか、徐々に声がか細くなっていく。しかし静寂の夜の空気はその声をも透二の耳に明確に響かせる。

「だから、知らず知らずのうちにお前のことを見ていた。いや、見ようとしなくても、お前は目立っていた。失敗を知らない男だったからな。何をやっても成功していた。それが努力の成果だったら、誰も咎めはしない。才能だとしても、ある程度は許容できる。だがお前のやり方は、能力は、常識を超えていた。物事を思い通りに進めるなんてふざけた力を持っていた」

幻想だ。こいつはファンタジーの読み過ぎだと透二は思った。

「川北透二。お前には日記をつける習慣があつた」

潜めた眉が開かれた。日記をつけていたことを誰かに話した覚えはない。そもそも誰かに見せるための記録として日記を書いていたわけではない。友人を自室に招く時にも、日記をつけたノートは引き出しにしまつてあるため目につくことはない。それでもひた隠しにしていたわけではないから、何かの話題の中で自分が日記をつけていることを話し、それをたまたま冬木が聞いていただけたという可能性もありえる。解釈の逃げ道があることに気付いて思わず安堵の息をもらしかけた。慌てて飲み込み、気難しい表情を取り繕うが、冬木は相変わらず透二の反応など気にも留めていない。

「普通、日記には過去のことを書く。それが一日の回想であれ、数週間分のたまつた宿題であれ、日記は過去の事実を書くものだ。だ

がお前の日記帳には未来のことばかりが描かれていた。今となつてはもう遠い過去のことだが、その日記を書いた時点ではまだ未来の出来事を書いていた」

そんな奇行をやらかした覚えもない。

「オレはお前の日記を読んだことがある。勝手に盗み見たんじゃない。お前の方からオレに見せつけてきたんだ。優越感たつぷりの表情でオレの手に日記を押しつけた。勝ち誇った態度だった。そこに書いてあった内容は、一見しただけではただの日記と何も変わらなかった。それは、そこに書かれている内容の大部分がすでに過去の記録になっていたからだ。だが、日記の一番新しいページに書かれている日付けは、まだ一日先のものだった」

どうしてコイツに日記を見せてやる義理があるんだ。

「その日付けがついたページにはこう書いてあった。」十月十日、崎本優子と付き合うことになった。向こうから告白してきた」……とな。まるで賞状を見せびらかすように、お前はその文字を何度も何度もオレに読ませた。本当に嫌な奴だ、川北透二！」

ふざけるな！ と透二は叫んだ。叫んだつもりだった。それでも冬木の表情が微塵も反応を示さないものだから、果たして本当に自分がそう叫んだのかどうかも怪しく思えてくる。あたりには人影どころか野良猫の気配すらなく、動く生き物といえば透二と冬木の二人だけだ。冬木の存在があまりに無機的で希薄なため、まるでたった一人で幻想を見ているかのような錯覚に陥ってしまう。ああ、幻想を見ているのは果たしてどちらなのか。なぜこの男はここまで己の体温を消すことが出来るのか。そしてこの男の伝えたい真実とは、結局どこへ向かっているのか。答えを得るには、とにかく話を聞き

続けるしかなかった。

「お前は崎本優子を狙っていた。恋をしていたんじゃないやなくて、狙っていたんだ。ステイタスの一つにしたかったんだ。誰の目から見ても上等な女性を、自分一人のものにしたかったんだ。相手に惚れて何かいなかった。ただ容姿が良くて、性格や能力を考慮しても上物で、周囲から羨ましがられるような相手が欲しかったただけなんだ。言葉で言わなくても、お前の態度と過去の日記の文面からそのことが読み取れた」

一切の感情を排除して、毒々しい憎しみだけを抽出した声が響く。

冷たい汗が流れた。透二が崎本優子という女子生徒との交際を望んでいたことは事実だ。それは仲間たちも半ば知っている。崎本優子はどちらかといえば女子同士のグループにいたことが多かったが、黄金時代にある透二の友好範囲は女子の中にも広まっていた。しかし、その中で特定の誰かと交際するようなことはなかった。思春期でありながら、狂おしく胸を焦がすほどの魅力を誰かに感じたことはなかった。それでも崎本優子を狙っていた。恋をしていたのではなく、狙っていた。そう意識したことは一度もなかった。

……もしかしたら、これも「覚えがない」だけのだろうか？

Winner

冬木という男は、透二と真逆の性質を持ってこの世に生まれた。どちらかといえば努力家で、ルールや規則に従順な大人しい少年。学問や運動に関する能力も決して悪くはないが、あくまでも悪くないといえる程度にすぎない能力である。人目を惹くほど素晴らしい成果を披露したことなど、中学生生活の三年間で一度もなかった。またその逆の意味で、例えば大きな問題や事故を起こしたとして注目されることもなかった。少なくとも冬木と透二、そして一人の女生徒を除く全員に対してはそれが当てはまった。

冬木少年は、何をするにしても要領の悪い人間であった。一つの事を成そうとするとき、人と同じだけの時間をかけて取り組んでいたはずが、いつの間にか自分だけ進行状況が遅れている。周囲に追いつくために自由な時間を削り、やるからには少しでもよい成果を出そうと懸命に努力を重ね、九割九分まで完成させても最後の最後で詰めをしくじり、最終的な評点を落としてしまう。いわば極端に本番に弱いタイプであったともいえるが、さりとて準備段階なら人より秀でているというわけでもない。期末試験のために徹夜を重ねて勉強するが、問題の読み間違いなどの些細なミスで高得点を逃すことも多い。冬木少年は常に真剣に取り組んでいた。己の心血全てを注ぐとまではいかないが、勉強に費やす時間はクラスの中でも上位に食い込むだろう。しかし、それが結果として表れることはない。

「お前と全く逆だ。オレはどんなに努力をしてもロクな成果を残せない。どうやったって必ず何かを間違える。人付き合いだってそうだった。……一人でいるのが好きなわけじゃない。出来れば輪の中に入りたい。でも、そのきっかけを作ることすらオレにはハードルが高かった」

そんなことがオレと何の関係があるんだ、と透二は思う。冬木はそれを予期していたかのように言葉を続ける。

「そんなことは、オレとは関係ないと思っているのだろう。今言ったことは、オレが生まれ持っていた性分であり、努力で越えられなかったことだ、と。それが誤った認識であることも後で教えてやる。だがこれはまだきつかけにすぎない。何をやっても上手くいかないオレはいつしか、何をやっても上手く収めてしまっお前の存在を気にかけるようになった。意識して観察してみると、お前は不自然に上手く行き過ぎていた」

人の隠された秘密とは、大きな事件が起きる時ではなく日常のさりげない場面で正体が見えるものだ。透二が傘を持って登校した日は、どれだけ空が晴れていようと、また彼以外の全校生徒が傘を持ってきていなくても、下校時刻になると必ず雨が降り出した。逆に透二が傘を持ってこない日に雨が降ることはなかった。一度や二度ならば「偶然だ」「何となく降りそうな気がしていた」で済むことだが、そう語る透二の顔を観察すると、かすかに優越感が混じっている。偶然でも直感でもない。その日の天候に関して確信を持っていた、と心の声でささやいているかのようなだった。

「授業をロクに聞いていないのにテストで良い点を取る。これはまだ納得できる。隠れて勉強しているとか、真面目にノートを取っている奴に協力してもらうとか、いくらでも可能性はある。スポーツに関しても似たようなものだ。川北透二。体育の授業中にお前のプレーを見ていると、ハッキリ言っ特別に運動神経が良いとは思えない。運動部に入っているから、オレみたいな奴と比べれば確かに動きにキレがある。だが同じく運動部の連中と比較するとそうでもない。むしろ情熱に欠ける分後れを取っているような印象だ」

ただでさえ冷える体に、嫌悪の冷気が這いあがる。自分より遙かにみすばらしい人間から蔑まれるほど屈辱的なことはない。

「お前が入ったチームは、かなりの確率で勝利した。サッカーでもバスケットでも、野球でも。たまに負けるとしても、ほとんど僅差での負けだ。それもお前以外のチームメイトがミスをして負けるといふパターンが圧倒的に多い。お前自身はほとんどミスを犯さない。それどころかファインプレーの連発だ。それでも負けることがある、というのがお前のセコい考えだ。授業のミニゲームで負けることぐらい別に問題ない。自分は多少目立って好プレーが出来ればいいから、たまには他の連中に勝ちを譲ってやってもいい。セコくて、傲慢な考えだ」

ギリリ、と歯を食いしばる音が響く。冬木は真剣だ。真剣に過去を語っている。嘘や誇張を交えているような様子はない。透二に特殊な能力があり、それを日常的に利用してきたというのだ。全てその事を前提に話している。両の拳を固く握り、ありつたけの憎悪を瞳に込めて地面を睨みつけている。生命力の感じられない肉体から憎しみの感情だけが放出される様は、人間の姿を留めていながらも昔話の怨霊のようだ。そのせいか、ふと奇妙な予感が胸に走った。冬木がこの話を全て語り尽くした時、何が起ころのだろう。ただ話をするだけでは済まされない。必ず、そしておそらくは不吉な事が起ころに違いない。

「逃げるなよ、川北透二。お前には全てを聞く義務がある」

冬木が釘を刺したのは、この時が最初で最後だった。

「お前の不思議な勝利、成功、名誉……。それらは日常の中にさり

気なく仕込まれていて、オレのように強く意識して観察しなければ不自然だと感じないものだった。だがお前が”成功する”タイプの人間であることは周囲に認識され、友好の輪を広めるのに大いに役立った。……そのなかには純粹に仲の良い友達もいただろう。だが人の心を掴む支配者としての自覚もあった。しかし、そんなお前にも掴み損ねた人間がいた」

崎本優子のことだ、と名前を言われるよりも先に理解した。崎本優子を自分の恋人に出来なかったこと、それが中学時代唯一の心残りであることは強く自覚している。

「お前は彼女を欲した。先にも言った通り、本気で惚れていたわけではなく、良い女性をものにすることの喜びを得るためにだ。だが優子はお前になびかなかった。あろうことか……」

その続きを述べたのは、冬木ではなかった。

「崎本優子は、冬木修平に興味を持っていた」

Lost

崎本優子は美しい女性だった。透二の記憶にある優子は、一番新しいものでも中学三年の姿だ。人生の中ではまだまだ大人への脱皮期間だが、その当時でも優子は「美しい」女性だった。少女というより女性と表現するにふさわしい雰囲気身を付けていた。子どもの成長は人それぞれだが、彼女は良い意味で早熟しているタイプであつた。外見ではなく、凛とした立ち振る舞いが大人の女性に近い印象を放っていた。

「彼女はみんなの憧れだった。透二、お前が自分のパートナーにふさわしいと見込んだぐらいだからな。男子なら誰もが彼女の隣を憧れた。出来るか出来ないかはさておいて、仲良くなれるものなら誰でもそうしたかった。高嶺の花だったから大抵の奴は本気で願ってはいなかったと思うけどな。オレもそうだった。男友達すらろくにできないオレが、彼女に近付けるわけがなかった」

崎本優子に挑む男は少ない。透二はその例外だ。透二は他の男達より頭一つ飛び抜けた人望があつた。なるほど、もしも崎本優子が誰かと交際しているという噂が立ったならば、そこに透二の名があつてもおかしくないと皆が考えていた。むしろその噂が立つことを望んでいる者すらいた。それは主に昼間のツンツン頭を筆頭とする透二の友人たちであり、その理由は透二と優子が交際すれば自然に己も彼女と近い距離にいられることになる、というものであつたが。

ところがやはり、高嶺の花はそう簡単に”俗世”には降りて来なかった。彼女は女子生徒同士では気さくに会話することはあつても、多分に子ども臭さの抜けない男子と積極的にコミュニケーションを取るような女性ではなかった。いかに透二が人の目と心を惹きやす

い力を備えていようと、人柄の幼さは周囲のものと大して変りなかった。

「いつ頃からだったかは忘れたが、お前は優子の気を惹くことを目標とするようになった。何度も言うが、優子に惚れたから相手をしてもらいたかったんじゃない。お前が欲したのはあくまでも憧れの的を射止めたという実績と賞賛だ。全てを思い通りに手に入れることが出来たお前にとって、崎本優子は唯一手間のかかる相手だった。……と、オレは途中までそう思っていた。オレは、お前が明らかに優子を狙っていることに気付き、それが意外に難渋していることを知った時、さすがの川北透二にも出来ないことがあったのかと驚いた。正直、いい気味だと思ひもしたけどな。羨望と嫉妬の混じった目でお前を見ていたおかげで、この一件はかなり興味深い出来事だった。でも……」

違った、とでも言うのか。透二は感情を抑えながら冬木の話聞いていたが、崎本優子に関して述べられた内容はほとんど正しいと思っていた。崎本優子を欲していたことも、結局手に入れられなかったことも正しい。この話題については否定できない。だが、冬木はそれをも覆すつもりだ。

「お前は決して焦らず、時間をかけて優子との距離を縮めようとした。些細なきっかけを利用して少しずつ自分の存在をアピールしたり、何かと理由をつけて二人が一緒にいられるような時間をつくった。いいや、一緒にいられるような時間を確保できる理由をつくった、というのが正しいな。理科の授業で実験の班を決める時や、くじ引きで当番や席順を決める時、お前はその力で自分と優子を同じ場所に結びつけた。距離を縮めるのに都合のいい理由をこしらえた。それだけでも物事を自分の有利に進めていることに変わりはないから、やはり川北透二は強運に恵まれた人間なのだと認識を改めたよ。

そして、少しずつではあるが、お前と優子は徐々に仲良くなっていた。まだ呼び捨てにするような間柄ではなかったが、他の男たちでは到底及ばない領域にまで踏み込んでいた」

歯ざしりがまた一つ。どうやら新たな恨みの鉾脈を掘り当てたようだ。

「真実は……それすらも見せかけにすぎなかった。体育のゲームでわざと負けるのと同じで、ほどほどに”勝利”を抑えているだけだったのだ。崎本優子の心を射止めるのに、本当は時間をかける必要など全くなかったのだろう。ただいきなり勝利を手にしてはつまらないから、力を抑えてわざと長引かせていたんだ。その気になればいつでも崎本優子をものに出来ていた。そうだ！」

突然冬木は叫び、立ち上がった。枯れ枝のような指を透二の眉間に突きつけ、唾液を飛ばして言葉を叩きつける。

「その余裕があったから、お前は回りくどい手段を取り続けていたんだ！ 結局全てはゲームにすぎなかったんだ！ 退屈しない程度に欲しいものを手に入れる、人を見下したゲームだ！ だが、オレはそれをブチ壊してやった！ どうだ、屈辱か？ オレがお前のゲームを否定してやったんだ。崎本優子はお前じゃなくて、オレの方に興味を持ってしまったんだからな！」

ここで初めて冬木が口の端を上げた。瞳も大きく開き、嘲りの笑みを投げかけている。透二の心境は不愉快だ。あまりにも不愉快だ。散々透二のことを”優越感に満ちた外道”と罵っていたながら、今は冬木がそれに染まっている。しかも、あの美しい崎本優子が、この醜い冬木に興味を持っていたというのだ。これが不愉快でなくて何だというのだ。不愉快なのは出会った時から続いているが、今この

瞬間がピークだと確信していた。

「彼女がなぜオレに興味を持ったのか、それはわからない。だが女心つてのはそんなものだ。あるいは、向こうも遊びのつもりだったのかもしれない。だがそんなことはどうでもいい」

……よくない。それを見過ごすわけにはいかない。

「彼女はオレに話しかけてきた。そう、中学最後の文化祭で、合唱の練習で夜中まで残されていた時。ようやく練習が終わって皆が退散しようという時に彼女の方からオレに声をかけてきた。誰もが驚いたが、誰よりもオレが驚いた。最初は『お疲れ様』という何気ない言葉だった」

言葉は何気なくとも、崎本優子が冴えない男に話しかけたということが重要だったのだろう。そう思いついた途端、さらに記憶が蘇ってきた。

練習が終わって帰り支度をしつつ、ふと崎本優子に視線をやると、窓際で誰かに話しかけていた。そうだ、覚えている。頭を鉄のハンマーで叩かれたような衝撃と、血液が足の裏から流れ出ていくかのような気持ち悪い感触。

人生で初めて、本物の屈辱と怒りを覚えた瞬間だった。

Plunderer

「オレが胸を張って誇れるものが、たった一つだけ存在する。それは星に詳しいことだ。幼い頃に、天文学者である叔父から上等な天体望遠鏡を頂いたおかげでな。星を眺めてその名を覚えることだけが日々の楽しみだった。何をやっても人並みの結果を出せないオレにとって、誰とも競うことなく、ただじっと星を見つめている間は何ものにも代えがたい時間だった」

星、と言われて、思わず透二は空を見上げた。夜空は相変わらず冷酷なほど澄み切っており、宝石箱をひっくり返したかのように無数の星々が散らばっている。透二の目に映る星はどれも同じ輝きにしか見えず、それらがどのような名称や分類で呼ばれているのかなどと興味を持ったこともなかった。

「だが、そんな知識が中学生の学園生活において何の役に立つ？ 多少は自慢に出来ることかもしれないが、オレには自慢を披露する相手すらいなかった。名前を知っているからと言って別に得するようないことはない。天文学部なんて高尚な部活もなかったしな。むしろ男らしくない趣味だと恥ずかしく思うことさえあったぐらいだ」

自分自身を嘲笑する冬木の姿はすっかり見慣れてしまったが、今の冬木の卑下には余裕が感じられる。その顔を見ることが堪らなく不愉快で、透二はずっと名も知らない星を見上げていた。その行為によって直接の不愉快を避けてはいたが、無理やり視線を外させられることへの屈辱だけはどうにもならなかった。これだけ嫌な思いをしてでも大人しく話を聞いているのは、やはり己の心の中に後ろ暗い記憶を感じるからだろうか。冬木の言葉によってもたらされる負の感情により、透二の内部に潜んでいた何かが目覚めようとして

いる。

（オレは、いったい何者なんだ）

透二は、冬木がわざと話を長引かせていることに気付いていた。透二の持っていた「能力」とは具体的にどのようなものなのか、そしてこの話を聞かせる冬木の目的は一体何なのか。さっさと言い切ってしまう良いものをあえて引き延ばし、事の背景を長々と聞かせている。理由はただ一つ。長引かせた方が透二の苦痛になるからだ。

「文化祭の練習で居残りさせられるまで、ずっとそう思っていた。いつもならとくに下校して家の窓から星を眺めているはずの時間に、教室の窓から星を見るのは不思議な気分だった。嫌な練習を受け続けている間、ちらちらと星を見上げることと気を紛らわせていた。影が薄いおかげで誰にも気付かれなかったはずが、たった一人よりによってお前の狙っていた崎本優子だけがオレの行動に気付いていた。女ってやつはつくづく不思議だよな？ ええ？ たぶん、崎本優子はその瞬間に初めてオレの存在を意識したことだろうよ。お前や優子のような人間とは真逆、いつも陰にいるオレの存在など気付いてすらいなかったかもしれない。だがそれはともかく、優子はオレの行動に気付き、そして興味を抱いた」

興味と言うより、珍しい動物を見かけた時の好奇心に近い感情だ。そう思うことにした。崎本優子が。あの美しい女性が。本気で冬木などに興味を持つわけがない、と信じたかった。と、不意に閃光が脳裏をかすめた。知らず知らずの内に、記憶の扉を開くキーワードを見つけてしまったようだ。次に蘇ったのは、これまで以上に忌まわしい記憶だった。

（崎本優子が、冬木なんかに興味を持つわけがない。あれはただの一瞬の気まぐれだ。偶然だ。明日になれば声をかけたことすら忘れてしまう程些細な事だ。……以前のオレも、こう考えたことがある。否定したかった。二人の間に繋がりが出来かけていることを否定したかった。このオレを差し置いて……！）

「いいぞ。だんだん昔の顔に戻ってきたな、川北透二。傲慢で、その癖神経質なほどプライドの高い目だ。当時のお前はもつと酷かったぞ。表面上は誰に対しても笑って見せてるが、その裏では常に他者を見下して、また自分を蔑むような奴に容赦しなかった。たった一度、崎本優子がオレに話しかけただけでお前はオレを心底憎むようになった」

「一度だけじゃない！」

思わず声を張り上げてしまった後で、それ以上に強い動揺を持って息を呑んだ。とうとう禁を破ってしまった。相手を狂人だと決め付けて話を聞き流すような余裕は完全に消し飛んだ。

「そうだ、一度だけじゃない。初めて声をかけられた翌日もまた、同じことが起こったんだからな。お前の心中はさぞかし取り乱していたことだろう。実はオレもそうだ。予想もしなかった出来事に、当事者のオレ自身が一番ドギマギしていた。お前のとはずいぶん違う意味でだけだな。しかし結局、崎本優子がどれだけオレに興味を持っていたのかは最後までわからず仕舞いだった。ひょっとしたらお前が最初に考えた通り、ほんの少しちよっかいを出してみただけで本当は何とも思っていなかったのかもしれない。その真実は永遠に明かされないだろう。その前にお前が行動を起こしてしまったからだ」

「オレは……。オレは、お前を呼び出した。お前が二度目に話しかけられた、その次の日だ」

「思い出したか。お前は昼休みに、理科の実験準備室にオレを呼び出した。オレとお前が直接顔を合わせて言葉を交わしたのはその時が初めてだ。そこでオレはようやくお前の秘密を知った。お前が自らオレに教えたんだ。例の日記をわざわざ学校に持ち込んで、内容をオレに読ませた」

「……日記を、見せた」

その場面までもが蘇ってきた。封印されていた記憶にも関わらず、ひとたび蘇ってしまえばそれは冷酷なほど鮮明な映像だった。実に醜い光景だった。過去の透二の前に立つ、怯えきった冬木の表情も醜いといえは醜いが、それ以上に透二自身から放たれるドス黒い空気が凄まじかった。息遣いが荒い。ガラス棚に映った自分の目が悪魔のように輝いている（まさに今現在の冬木と同じ目だ）。そのおぞましい印象が強すぎるため、そこから先の記憶はまた一旦途切れていた。

「オレの秘密はいつたい何なんだ。オレはそこでどうしたんだ」

懇願するような声を絞り出すと、冬木が怒りの牙を剥きだした。

「思い出せないのか？ お前はオレの存在を消したんだ！ 以前から少しずつオレの力を奪っていたお前は、今度こそオレの持つ全てを奪い取ってしまったんだ！」

R e v e n g e

運命、あるいは運勢というものはどのようにして決まるのだろうか。善に尽くせば幸運に恵まれ、悪に傾けば不幸が押し寄せるといふ話は一種の教訓として知られている。だがどこまで信じてよいものだろうか。善と悪、幸と不幸の定義すら曖昧なこの世界で、それらの判断は誰が下すのか。天上に住まう「神」というものが、公正な判断でもって裁きを下しているのならば問題ない。もし、他者の運勢を操る力が人間に与えられたとしたら……。

「教えてやるよ。あの日、オレがお前から受けた説明をそのまま返してやる」

視線で人体を攻撃できるならば、透二はこの数十分の間でどれだけの重傷を負わされたことか。そしてこの瞬間に間違いなく絶命していただろう。語るにつれて冬木の憎悪は研ぎ澄まされた殺意に変わり、その代わりに、というにはあまりに奇怪なことだが、狂気が薄まっていった。

「お前はオレの運を吸い取っていたんだ。そのきっかけまでもお前は教えてくれた。事の始まりは本当にくだらないものだったらしいな。中学一年の夏、美術の授業で写生の宿題を出された。モデルは自由で、オレは星空を描くことを選んだ。絵を描くことは不得手だったが、幼い頃から観察し続けていたおかげで今回はいい出来のいい作品を描く事が出来た。だがそれこそが致命的な不幸だったのだ。その頃、お前はまだ平凡な中学生だった。自分の能力に気付いていなくて、クラスの中でも特別目立った存在ではなかった」

透二の心臓に、鋭い針が突き刺さる。中学時代は無敵だったとい

う認識の内側から、冬木と大差ないみじめな自分の姿が浮かび上がってくる。その姿が現在の自分に重なって見えたような気がして、顔中からさっと血の気が失せた。

「美術の教師は、出来の良い作品を描いた生徒を表彰すると言っていた。今にしてみれば子ども騙しの小さなものだが、運動も勉強も並程度にしか出来ない人間にとっては、自分が他者から認められる貴重な機会だった。だからこそオレも努力したし、声に出さないがお前も密かに狙って気合を入れていた。……つくづく下らない話だな。たかがそれだけのことがきつかけなんだ。そして作品を発表する日の朝、お前は偶然オレの絵を見た」

またしても透二の記憶が蘇る。針を貫かれ、穿られた穴から記憶の断片が滲み出て来るかのような。透二もまた、自分の描いた絵に自身を持っていた。美術の宿題に本気で取り組む生徒などほとんどおらず、透二が相対的に好成绩を得る可能性は高かった。しかし、その期待を破ったのが冬木の作品だった。

「お前は恐れた。たかがちつばけな名誉のために、必ずしも障害になるとは限らないオレの存在を疎んじた。自分ではなく、オレが成功してしまうことを嫌ったんだ。その願いがお前の能力を呼び覚ました。机の上に出したオレの絵が風に飛ばされて水たまりに落ちる、なんてふざけた不幸を引き起こしたことが始まりだった。川北透二」

冬木は、氷のような冷たい息を吐く。傷つき精魂尽きかけた透二に対して呪縛の手を緩めることはない。

「お前が持っていた力……。それは、オレの運を吸い取ることだったんだ。他の連中には効果がないらしいが、何故かオレにだけは百発百中で成功していた。オレが努力によって物事を成そうとすると、

その最後の段階に来てお前に運勢を吸い取られる。その事が判明して以来、お前は全く自分で努力をしなくなった。全てオレから吸い取ってしまうことにしていたのだ」

「願った……。強く願えば、それが叶った……」

舌と顎が意思に反して動きだす。だが今の透二は、無意識の懺悔に驚く気力すら起こらない。

「そうだ、強く、心の中で強く念じることで能力は発現する。だからお前は日記をつけることを選んだ。自分の思い通りに動く未来を描くことで、より鮮明に能力を発揮することができる。あとはオレから吸い取った運で結果を残すだけだ」

「体育のゲームで、オレはいつも勝っていた。それも……」

「オレが、お前と違うチームにいたからだ。さっきはあえて言わなかったが、お前がゲームで勝利するのは、いつもオレが相手チームにいた時だ。同じチームにいた時は逆にわざと負けるように仕組んだ。勝にしても、負けるにしても、オレがミスをしてお前がファインプレーをするという流れは常に存在していた」

冬木の瞳の奥に輝く光はますます熱を帯び、吐き出される息はそれ以上に冷気を帯びる。

「餌だった。オレは完全にお前の餌になっていた。ただ運勢を奪われるだけの存在だ。どうしてこんな奇妙な縁が出来てしまったのか、それは今でもわからない。それどころか、かつてのオレは自分の“成功”が奪われていることにも気付かず、お前のことを尊敬すらしていた。本当にタチの悪い話だ。オレは子どもの頃から運に恵まれ

ない性質だったが、中学に入ってからますますそれが酷くなった。その原因を尊敬していた！」

「……信じられなかった！ ただの偶然だと思っていた！ ただ少しだけ試してみたら上手く行ったから……」

「上手く行ったから、それを続けたんだろう！ オレが不幸になるのをわかっていて、それでもお前は止めなかった！」

殺意の針は、もはや巨大な杭にまで成長していた。胸に杭を打たれて、夜の大気にがっしりと固定されている。

「ただの餌にすぎないはずのオレと崎本優子が近づいたから、お前は再び焦りを感じた。傲慢な怒りを抱いてオレを招き、真実を伝えた。そしてここからがお前の犯した最大の罪だ……。お前はオレの持つ運勢を完全に奪うことにした。あらゆる事柄において”成功”することを禁じてしまった！ 恐ろしいことだ。オレはこの世界に存続することすら成功できなくなってしまったんだからな！」

最後の記憶が蘇った。否、かつての川北透二がそこに蘇った。目の前の冬木を徹底的に軽蔑し憎悪する男だ。透二は叫んだ。

「どうしてお前がここにいる！ あの日、オレが消してしまったはずのお前が——！」

叫びは途切れ、余韻だけが夜闇に響いた。記憶を取り戻した次の瞬間、川北透二という人間は消滅していた。

End

夜空の星々は、何事もなかったかのように冷たく輝いている。冬木は静かに息を吐きながらベンチに掛け直した。瞳の奥に燃えていた凄まじい炎は消えている。それに代わり、青白い肌に健康的な血色が戻り、吐き出される息も生命力のある温かさを伴っていた。

「これで一件落着ね。とりあえずお疲れ様ってところかしら」

女性の声が背後から近づいても冬木は動じない。公園と道路を仕切る低い壁の裏に彼女が隠れていたことなど、初めから知っていた。彼女は落ちついた声と容姿に見合わない身軽な動作で壁を越え、冬木の隣に腰かけた。中学時代から大人びた女性であったが、本当の“大人”になるとますます美しさに磨きがかかっている。昼間は豪華な晴れ着姿であったが、夜の公園には似合わないと思ったのかスーツに着替えている。平凡な格好でありながら、本人の聡明さと相まってますます美しさをひきたてている。涼やかな風に吹かれ、栗色の髪先が肩の上で揺れている。

「貴方は自分で思っている程ダメな人じゃないわ。むしろ私から見ればとっても素敵。今こうやって横顔を見つめていると尚更そう思う」

「……君にそう言ってもらえる日が来るなんて、想像もしていなかった」

冬木の反応は冷静だ。顔を正面に向け、つい数分前まで川北透二の座っていた場所を見つめている。

「私が貴方について一番評価しているのは、そういう正直な発言で
きることなのよ。さっきだってそうでしょ？ 自分にとっても辛い
告白を、貴方は最後までやり遂げたわ。誰にでも出来ることじゃな
いのよ、それって」

崎本優子も視線を冬木から外し、透二の消えた場所に移した。美
しい顔に一切の感情をも加えていないことが、彼女の透二への評価
を物語っている。

「それに比べて、本当に酷い男」

冬木は何も答えない。

「少なくとも彼には出来ないわね。自分の弱さを認める勇氣なんて
これっぽっちもない。自分の力に思いあがって、貴方を虐げ続けた
愚かな男。プライドを傷つけられてすぐに周りが見えなくなるなん
て、器が小さいとしか言いようがないわ。貴方を呼び出して自分の
力を明かした時、すぐ扉の向こうに私がいることにも気付かないな
んて……」

「オレだって気付いていなかった」

「ふふ、貴方はいいのよ。マヌケなのは彼一人だけ。彼が力を使っ
て私を手に入れようとしたから、私は彼に関心を持ってこっそり後
をつけていたっていうのに。彼と貴方が会話する所を見たのは私も
その時が初めてよ。だけど本当に、驚いたわ。私が貴方を意識する
ようになったのはね、それよりずっと前のことなのよ。彼が私に干
渉し始めるよりも先。表には出さなかったけど、もう長い間私は貴
方のことを想い続けていたの」

「……光荣だ」

「疑ってる？ ……そうね、そう思われても仕方ないわ。だけど、貴方に何と思われようと私は復讐したかったの。努力家な貴方から運勢を吸い取って、存在までも消してしまった男。その力で私の心までも奪おうとしていた男。本当に許せない」

「だから、この仕返しか」

「ええ」

答えながら崎本優子は微笑んだ。宝石のような笑顔だった。

「あの時、彼は貴方の運勢を全て吸い取った。貴方がこの世界にいたという痕跡ごと消してしまうぐらい、徹底的に奪いつくした。膨大なエネルギーが奪われたけれど、その全ては彼のものにならなかった。人間一人のエネルギー全てを受け入れるには、彼の器は小さすぎたのよ」

「受け入れられず、溢れたエネルギーが君に宿ったのか」

「ええ。だから、その現場にいた私だけが貴方のことを憶えている。彼は自分の受け取った力の大きさに屈して、その力を失ってしまった。このあたりの理屈は私にもよくわからないんだけど、きっと彼と貴方、そして私の三人の間には特別な結びつきがあったのよ。縁だとか運命だとかって呼ばれる関係があって、彼はそれを利用していただけ。その関係に異変が生じたから今度は私に力が回ってきた。そう思うことにしたの」

「その力で、消えたオレを蘇らせた」

「彼の存在を奪って、ね。私が自分で受け取るんじゃなく、奪ったものをそのまま貴方に注ぐようにしただけ」

崎本優子は手に何も持っていない。川北透二は願いを日記に書くことで思念を高めていたが、優子は一切の道具を用いずに同じことをやってのけた。それは彼女の願いが強く、真剣であつたことを示している。冬木はそのことに気付いていたが、まだ優子の顔を見ようとしなかった。

「人の運命なんて、意外なところで勝手に繋がってるものなのね。私はあんな男と関係があるだなんて絶対に嫌だけど、そのおかげで今のこの状況があるのだから仕方ないわね」

「……もう行こう。川北透二は消えた。オレたち以外の誰も彼の事を憶えていないし、彼が存在したという痕跡も無い。これで全ては終わっただんだ」

「そうね、そろそろ帰りましょう。せくっかく取り戻した命だもの、復活したその日に風をひいちゃダメよね」

先に優子が立ち上がり、冬木も後に続く。星空は相変わらずの表情だ。

「オレを蘇らせてくれた君には感謝している。だけど、一つだけ聞きたいことがある。どうしてオレに昔話をさせたんだ？」

「あら、決まってるじゃない。彼にたっぷり後悔させるためよ。自分の罪を忘れたまま消えるなんて許さないわ。全てを思い出して、せめて後悔するような素振りでも見せればよかったのに……結局最

後まで醜い支配者気取りのままだったわ」

「後悔したとしても、彼を許したりはしなかっただろう」

「ふふ」

悪戯っぽく笑う優子の顔を、冬木は初めて観察した。

彼を消滅させたのは、オレを復活させるためか、それとも復讐のためか。彼女に問えば「両方よ」と当然のごとく答えるだろう。美しい仮面の奥の真意は見通せない。探ることも許されない。復活こそ果たしたものの平凡な男に過ぎない冬木は、ただ彼女に従うだけであつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4283/>

Erasure

2010年10月14日19時08分発行